

令和5年9月終了

修士（学術）論文

スポーツ・ツーリズムを通じた地域の活性化に関する研究

Research on regional revitalization through sports tourism

令和5年8月31日

高知工科大学大学院 工学研究科 基盤工学専攻

起業マネジメントコース

学籍番号 1255126

谷内 康洋

Yasuhiro Taniuchi

## 目次

第1章	はじめに	3
第2章	研究概要	4
第3章	先行研究	5
3-1	スポーツイベントの効果	
3-2	徳島県阿南市の事例	
3-3	新潟県十日町市の事例	
3-4	沖縄県名護市の事例	
3-5	小括	
第4章	リサーチ・クエスチョン	7
第5章	調査概要	9
5-1	調査概要	
5-2	土佐町の概要	
5-3	土佐町とスポーツ・ツーリズムの関係	
5-4	土佐町でのアンケート調査	
5-5	土佐町でのデプスインタビュー	
5-6	土佐町でのグループインタビュー	
5-7	黒潮町の概要	
5-8	黒潮町とスポーツ・ツーリズムの関係	
5-9	集落活動センター	
5-10	黒潮町でのアンケート調査	
5-11	黒潮町でのデプスインタビュー	
5-12	土佐町と黒潮町との調査結果の比較	
第6章	まとめ	27
第7章	参考文献・資料	28

## 第1章 はじめに

近年、地域におけるスポーツ・ツーリズムは、球場やスタジアムなど拠点となるスポーツ施設を活用したプロ野球やJリーグなどのプロ・トップチームのキャンプ、大会誘致に加え、カヌーやサイクリングなど地域の自然環境や気候などの地理的特性を最大限に活用できるスポーツを対象とした合宿誘致やイベントの開催が盛んである。各地域で地域の特色を生かしたスポーツ・ツーリズムの取り組みが進む背景には、観光立国推進基本法が制定（2007年）されたこと、2012年に観光立国推進基本計画にスポーツ観光の領域が追加されたこと、またスポーツ・ツーリズム推進基本方針が策定（2011年）されたことなどがある。さらに、文部科学省は2010年に、スポーツ立国戦略を策定（2010年）し、2011年に制定されたスポーツ基本法では、「スポーツは人と人との交流及び地域と地域の交流を促進し、地域の一体感や活力を醸成するものであり、人間関係の希薄化などの問題を抱える地域社会の再生に寄与する」ことが明示された。さらに2017年に策定された第2期スポーツ基本計画には「スポーツを通じた地域活性化や共生社会の実現」が目標として提示された。

こうした国の動きにともない、地方自治体においても様々なスポーツ推進計画が策定された。これらでは、歴史的建造物や温泉などの観光資源が乏しい自治体においても、地域の海や川、山、道路など豊かな自然の資源を活用したスポーツ・ツーリズムを推進していくことなどが明記されている。このような動向には、スポーツと地域の食や文化など様々な観光資源と融合をさせていく取り組みを推進していくことで地域が活性化される、という期待が込められている。

高知県においても、2018年に策定された第2期スポーツ振興計画において、スポーツ・ツーリズムを推進し、これにより人材の活用や育成、交流人口の拡大、雇用創出を図り、地域の活性化につなげる目標が明記された。こうした結果、スポーツ・ツーリズムによる県外来客数は、2014年の51,719人から、2019年には98,296人まで増加（約1.9倍）した。一方で、県土の84%を森林が占める高知県においては、県内34市町村のうち28市町村が全部又は一部過疎地域に指定されており、その多くは国際的なスポーツイベントが誘致できるスタジアムやアリーナなどのスポーツ施設を有していない現状がある。このような状況を踏まえ、これらの自治体においては、各地域の自然環境など地理的特色を生かした取り組みが進められている。

木田（2007）によると、こうしたスポーツ・ツーリズムの取り組みが地域にもたらす効果は、経済的効果と社会的効果とに分類される。経済的効果には、スポーツの観戦やスポーツ大会・イベント参加、合宿に伴う宿泊費や飲食費、物販購入費や交通費などが含まれる。また社会的効果には、人材の育成、スポーツの振興、地域アイデンティティの醸成、地域コミュニティの形成、各種交流促進、あるいは地域情報などの発信が含まれる。木田（2007）は、スポーツイベントにおける経済的効果は多く取り上げられているものの、社会的効果は積極的に取り上げられていない、と指摘している。実際に、スポーツ・ツーリズムの経済的効果に関する研究事例は多く散見されるものの（例えば、渡辺（2014）は、著書「経済波及効果の可能性と限界」において、経済波及効果の構図を示し、関（2016）は、論文「スポーツ合宿の経済波及効果に関する研究」において、スポーツ合宿に特化した経済波及効果の推計を実証してい

る.) , 社会的効果に関するそれはあまり研究が行われていないのが現状である (山口他 2019) .

このような状況を踏まえ, 本研究では, 特にスポーツ・ツーリズムが地域にもたらす社会的効果に焦点をあて検証する. 事例として, 地域住民が協力してアマチュアスポーツチームの合宿を迎え入れている高知県土佐町及び黒潮町のグループの活動を取り上げ, これらの取り組みにおける社会的効果を検証し, 今後スポーツ・ツーリズムがもたらす新たな地域活性化の形を検討する.

## 第2章 研究概要

### 2-1 地域におけるスポーツ・ツーリズムの特徴について

スポーツ・ツーリズムは, 観光庁のスポーツ・ツーリズム推進基本方針(2011年)において以下のように定義されている. すなわちスポーツ・ツーリズムとは, 「スポーツ資源とツーリズムとの融合を図っていく取り組みであり, スポーツを「観る」「する」ための旅行そのものや周辺地域観光に加え, スポーツを「支える」人々との交流, あるいは生涯スポーツの観点からビジネスなどの多目的での旅行者に対し, 旅行先の地域でも主体的にスポーツに親しむことのできる環境の整備, そして MICE 推進の要となる国際競技大会の招致・開催, 合宿の招致も包含した, 複合的でこれまでにない「豊かな旅行スタイルの創造」を標榜するものである. つまり, この3つの側面でスポーツの素晴らしさや感動を感じられるのが, スポーツ・ツーリズムの魅力である. スポーツをする人, みる人にとってのスポーツ・ツーリズムの魅力は, 新しい出会いと体験である. スポーツを通じて, 訪れたその地域の方々との交流や地域の自然や文化, 食に触れることで, 今まで知らなかったその地域の魅力を発見することができる.

スポーツを支える人は, 彼らを迎え入れる又は誘致する側であり, スポーツ大会の開催や運営, 合宿誘致や地域に密着したスポーツチームの支援を行う団体や行政, 個人を指す. この団体や行政が連携し参加選手や関係者, 観戦客の受け入れ態勢を整えることで, 宿泊や飲食, 交通などの産業に加えて, 施設の整備, 改修などから経済的効果がもたらされる. また, こうした活動が地域に根づいていくことで, 地域住民同士のコミュニティの場づくりや, やりがい, 楽しさを生み出す源泉となる. さらに, 選手との交流を通じて見慣れている地域の自然環境の価値の再認識や, 自らもスポーツをしてみたいとなる感情や行動の変化が生じるのが特徴である. 本研究では, 地域が連携してスポーツ合宿の受入れを行っている土佐町及び黒潮町の住民を対象に, アンケート調査及びヒアリング調査を用いた質的検証を行う.

## 第3章 先行研究

### 3-1 スポーツイベントの効果

渡辺 (2014)によると,これまでのスポーツに関わる行政の取組は,概して一過性型,施設提供型であり,その運営は,地域の体育協会などに委託する受け身的な取り扱いが一般的である.それらの成果は選手や役員の飲食や宿泊などの需要を生み,地域経済の波及をもたらすと捉えられてきた.行政がことを起こすとき,第一に問われることは地域にどのような効果があるのか,という点である.財政出動には,成果としての経済効果が大きく問われる.一般論として,スポーツイベントの開催は,地域に選手かやってきて地元にお金落ちるという構図が描かれると述べている.また,木田 (2014)によれば,わが国におけるスポーツイベントの開催は,経済的効果を優先し,本来発揮可能な社会的効果をなおざりにしてきたとも言える.国民体育大会をはじめとした行政主導のスポーツイベントの開催は,開催に伴うインフラ整備に多くの投資を行い,その経済的効果のみが重要視されてきたきらいがある.定期的開催されてきた行政主導によるスポーツイベントでは,開催することが目的化しているケースも多々見られ,本来の開催目的にそぐわないスポーツイベントも発生してきている.一方で,スポーツイベントの開催による社会的効果については,わが国のみならず欧米においてもその定義は明確でなく,ましてやその評価や評価手法も定まっていない.したがって社会的効果といっても人さまざまな捉え方があり,効果をどのように捉え,それに如何に効果的に発揮していけばよいかの明確になっていない.さらに,経済的効果についてもそれなりに算出手法があるものの,波及効果の捉え方や産業連関表における項目などの正当性に問題があるとも言われている(原田,2002).無論,地域活性化,あるいはまちづくり・地域づくりの定義なども一様に定まっているわけではない.一般にスポーツイベントの開催による経済的効果に関する研究事例の検証数に比べ,社会的効果と呼ばれている効果に関するそれは少ないと言われている.その主たる理由としては,社会的効果が内包する本質的な問題点,すなわち社会的効果それ自体の定義が一見していて,あいまいな部分が多いことをあげている.このようにスポーツイベントがもたらす社会的効果を定義することは困難が伴う.さらに,経済的効果と異なり,社会的効果は数値による具体化やそのような数値を基にした客観的な社会的効果を算出することは非常に難しい.そもそも社会的効果とは何だろうか.社会には,人間がコミュニケーションを手段として相互に行為しあう過程により固有の結合をつくりあげている場という,共通理解があるように思われる.これをスポーツイベントの効果にあてはめて考えてみれば,スポーツイベントの開催が,それに関連する人々との関係,もしくは結びつきがもたらす効果をスポーツイベントの社会的効果として定義することができる.木田は,スポーツイベントの開催による社会的効果として次のものを定義している.

- ・地域アイデンティティの醸成
- ・地域コミュニティの形成
- ・交流の促進
- ・地域情報などの発信
- ・人材の育成
- ・スポーツの振興

### 3-2 徳島県阿南市の事例

徳島県阿南市は、野球のまち推進課を創設（2010年）し、野球によるまちおこしに取り組んでいる。同市は、2007年に整備した「アグリあなんスタジアム（5,000人収容可能な観客席、ナイター照明設備完備）」を拠点に、アマチュア野球大会の誘致・開催、合宿誘致、交流イベントの開催などを行っている。この取り組みを野球関係者だけでなく個人や団体が支援しており、例えば、地元婦人会による高校・大学などの合宿チームへの湯茶接待や食事配膳が行われている。寄付によって四国八十九番目の寺として道の駅に設置された「野球寺」では、女性団体のメンバーが、お遍路客にそうするように、市外からの選手をお接待している。交流会では、連が阿波踊りを披露し選手と一緒に踊っている。また、阿南市の60歳以上の女性達が「来る人に喜んでもらいたい」との思いから応援隊チアガール「AB060」を結成し、シニア野球大会などを盛り上げている。このように様々なおもてなしがなされている。

和田（2021）によると、事業開始当初は野球のまち構想に賛同する市民は少なかったが、事業実績が積み重ねられ、メディアにも取り上げられるようになると、構想に賛同するものが増えたとある。また、野球大会や野球観戦ツアーへの参加チームは県外チームより県内チームがやや多く、県内チームのほとんどは日帰り参加である。こうした状況を見ると野球のまち推進事業が阿南市にもたらした経済的効果は必ずしも大きいとは言えないものの、野球関連イベントの宿泊客を受け入れる一部の施設は宿泊や宴会の需要が新たに発生し、売上増につながった例も見られたとある。また、社会的効果として、こうした町の取り組みに賛同し、関わった者の社会ネットワークの形成・強化につながるとともに、阿南市への愛着や誇り、一体感を高めたとされると述べている。

### 3-3 新潟県十日町市の事例

十日町市は、2002年のFIFAワールドカップ日韓大会、クロアチアチームのキャンプ地となった。上村（2014）によると、クロアチアのキャンプが内定した時点では、正直、市民の関心は関係者を除けばそれほど高いものではないと感じていたが、事務局を市街地の中心地に移動し、保育所・学校給食にクロアチア料理を数回提供し、また、クロアチア語の勉強会の開催、選手全員の顔写真入りのポスターを全世界帯に配布したことなどにより、日増しに関心が強くなり、ボランティアの申し込みも順調に増えるようになった。クロアチアの来日が近づくと、事務局に「何かしたいけれど、どうすればよいか」と言ってくる市民や激励の言葉や寄付金を届ける人が現れ、また、自発的に国道沿いにクロアチアコック機や歓迎のポスターを飾る市民も多く出てきて、事前のムードは非常に良い状況になってきたと述べている。

また、辻本（2015）によると、キャンプ地運営には多くの地元ボランティアが参加して、①世界の人々とのふれあい、②国際交流の楽しさを実感、③マスコミによる情報発信により、日本国内のみならず、海外にも十日町市の知名度が広がったとある。

### 3-4 沖縄県名護市の事例

秋吉等（2013）は、スポーツ・ツーリズムを受け入れる側である名護市の住民に対し、スポーツ活動、スポーツ観光の効果、及び地域愛着に影響を及ぼす要因を明らかにするために、質問紙調査を行っている。ここでの認知モデルは、住居歴や地域におけるスポーツへの関与度が、地域における情緒的繋がり、あるいはスポーツ・ツーリズムの効果の認知に影響する、

というものである。検証の結果、スポーツツーリストを受け入れる側にいる住民は、スポーツ観光の効果を認知することで地域への愛着が強くなり、さらに、地域愛着と生活満足度（QOL）には関連があることが明らかになった。これらの結果に基づいて、秋吉等（2013）は、地域住民がスポーツツーリストに対する投入コストよりも得られる便益のほうが大きいと知覚し、したがって多くの住民がスポーツ・ツーリズムの効果を好意的に捉え、推進を支持しているのではないかと結論している。

### 3-5 小括

これまでみてきたとおり、多くの先行研究ではスポーツイベントの効果について、主として経済的効果によってその評価がなされている。縮小する地域経済を前提とすれば、経済的効果が重要な評価指標として挙げられることは、当然の帰結と考えることができる。しかし、近年では経済的効果に加えて「社会的効果」についても議論がなされている。次章ではその点に触れながら、本研究のリサーチ・クエスチョンを提示したい。

## 第4章 リサーチ・クエスチョン

かくして先行研究が示すとおり、日本におけるスポーツイベントの開催は主としてその経済的効果に着目してきた。これまでスポーツ施設の整備は、国体やプロスポーツ誘致などのスポーツイベントの開催にあわせて、周辺道路・宿泊施設などの関連インフラ整備と併せて積極的に進められてきたことから、経済的効果に重点がおかれ、社会的効果に焦点をあてることが総じて少なかったものと考えられる。また、社会的効果は経済的効果とは異なり、定量的に把握し数値を基にした客観的な効果測定を行うことは極めて難しいことも、要因であると考えられる。

高知県のスポーツ・ツーリズム推進の取り組みにおいても、プロスポーツのキャンプ・大会誘致、アマチュアスポーツの合宿・大会誘致などのスポーツイベントの開催による重要評価指標（Key Performance Indicator「以下、KPIという。」）は、このスポーツイベントを「する、観る、支える」ために県外から訪れた人数である。KPI上は経済的効果に着目していることと言える。ただし、社会的効果に着目していないわけではない。この取組を含む「第3期高知県スポーツ推進計画（2023.4～2027.3）」において、計画に掲げる目指す姿は「スポーツの楽しさや感動を共有し希望と活力ある社会の実現」である。木田（2014）が述べるとおり、スポーツイベントの開催による経済的効果と社会的効果は一体として考えていくことができ、経済効果と社会的効果は相互に連動して効果を発揮させていくことが可能である。本研究の対象地域で言えば、土佐西南大規模公園やカヌー施設として整備されたさめうら湖を地域の人々が地域資源として捉え、そこに地域の食や文化を組合せて地域以外の人々との交流が促進する仕組みを構築していくことで、地域の人々に社会的効果（地域アイデンティティの醸成、地域コミュニティの形成、交流の促進、地域情報などの発信など）が生じるのではないだろうか。

高知県を含め多くの地域で、人口減少・少子高齢化が急速に進み、地域コミュニティの活

力低下が課題となっている（国土交通白書 2005）。上述のとおり、スポーツ・ツーリズムの取組が地域に経済的効果をもたらすことは言を俟たないが、社会的効果は一様に示されているわけではない。先行研究から、スポーツツーリストの受け入れに関わることで、地域コミュニティの形成、地域への愛着や誇りを高めることにつながるなど、地域社会に前向きな作用をもたらすことは明らかになっている。そこには、スポーツが持つ特有の力（スポーツに携わる方々は、目標に向かい、努力を重ね、その姿は様々な場面で人々に勇気や感動を与えることができる力）が地域でスポーツツーリストを支える方々に作用していると考えられる。高知県がスポーツ・ツーリズムの取組を推進していくうえで、経済的効果に加え、スポーツツーリストの受け入れに関わる方々が、人と人とのつながりを創り出し、地域で暮らす幸福感・心の豊かさ、生きがいなど内発的な活力をもたらすことに着目すべきである。人口減少・少子高齢化が進展するなか、スポーツ・ツーリズムを通じた地域の活性化とは、この点を重視すべきではないかと考えられる。

本研究では、上述する先行研究の理論展開を応用し、地域が連携して学生チームのスポーツ合宿の受け入れを行っている土佐町及び黒潮町の住民を対象に質的調査を行う。調査は、アンケート調査、次にその結果を補完し受入に関わる地域住民に生じる心理的側面を深掘りするためデプスインタビュー及びグループインタビューを行い、その形成過程を明らかにしていくことで、地域住民にもたらす社会的効果の検証を行う。

検証を行うにあたり、地域住民にもたらす社会的効果として、次のような仮説を設定した。

<仮説>

- H1. やりがい・楽しみにつながる。
- H2. 地域のスポーツ参加の動機付け（本人だけでなく家族や知人にスポーツを勧めたくなる）につながる。
- H3. 地域への愛着心・誇りが生まれる。
- H4. 町の政策として移住促進よりスポーツ・ツーリズムの方が取り組みしやすい。
- H5. 経済的効果より社会的効果を期待している。
- H6. 四国遍路の接待文化は合宿受入時のおもてなし精神と関連性がある。



## 第5章 調査概要

### 5-1 調査概要

本調査では、スポーツ・ツーリズムを受け入れる地域において、受け入れに関わる地域住民にもたらす社会的効果を検証するため、土佐町で合宿を行う武庫川女子大学カヌー部の食事支度を行っている女性グループ「牛のうどん屋さん」、宿泊施設から練習場所のさめうら湖までの送迎者、及び黒潮町でスポーツ合宿を行う学生チームの宿泊受入を行っている集落活動センター「であいの里蜷川」、「かきせ」の地域住民を対しアンケート調査等を実施した。

### 5-2 土佐町の概要

土佐町は四国のほぼ中央に位置し、人口は約3,750人である（2020年）。また1973年に建設された早明浦ダムは「四国の水がめ」と呼ばれている。土佐町（2023年）によると、土佐町は、美しい自然と水と森を資源とした農畜林業が基幹産業である。農業では棚田地形を活かした県内有数の良質米が採れ、畜産では県内特有の和牛「土佐あかうし」の県内最大の産地であり、町面積に占める森林割合が87%を有するなど林業が盛んである。医療・福祉・介護では、地域に密着した小規模な拠点で子どもから高齢者まで、必要なサービスが提供できる「あったかふれあいセンター事業」や、地域に住むお年寄りの生きがいを目的に地元有志が運営する福祉施設「とんからりんの家」がある。子育て支援では、高校生までの医療費や保育料、小・中学校の給食の無償化、結婚、出産祝い金、保育助成金制度や子育て支援センターなどの子育てに関する支援が行われている。こうした町の施策が、地域の人々の互助の気持ちを育み、絆を強くし、結いの精神が醸成されたといえる。教育では、保・小・中・高と地域ならではの環境や魅力を生かした子供たちを支える教育が推進されている。観光では、自然体験型観光を推進するため早明浦ダムを活用し、2020年にキャンプ場やカヌー、サイクリング、サップといったアクティビティの拠点となる湖の駅「さめうらレイクタウン」が整備された。



(土佐町の位置図)



(さめうら湖)

### 5-3 土佐町とスポーツ・ツーリズムの関係

土佐町スポーツコミッションによると、さめうらダムは、もともと原則として非動力船が入ることはできなかったが、西日本最大のダム湖面であるさめうら湖を地域資源と捉え、町おこしを計画した土佐町と本山町がダムを管理する水資源機構と協議を行い、2018年からカヌーが入れるようになった。これを受け、2020年に「さめうらカヌーテラス」が整備され、ここを拠点にさめうら湖を活用したアウトドア・アクティビティの推進やコミュニティスポーツ、インバウンドを含む観光振興策を推進していくことを目的に「土佐町スポーツコミッション」が2021年に設立された。さめうら湖は、周囲を山に囲まれて風の影響を受けにくいいため波が立ちにくいのが特徴で、直線1キロメートルのコースが設置できるなどカヌーにとって大変適した場所である。現在、地元の小学生から高校生までのカヌーチームによる練習やカヌーの楽しさを知ってもらうための体験会の開催が行われている。施設としては、トレーニングジム、国内初のハンガリー式パドルプールがあり、また、カヌーの強豪国であるハンガリーから元世界チャンピオンをヘッドコーチとして招聘している。土佐町と土佐町スポーツコミッションは、こうした地域の自然を最大限に生かしたスポーツ環境を整えてスポーツ・ツーリズムを推進し、その第一段として武庫川女子大学（兵庫県）のカヌー部が合宿を開始した。武庫川女子大学カヌー部は、2011年から全日本学生選手権カヌースプリントを11連覇中の強豪校である。同大学は、毎年3月に香川県で行われる府中湖カヌーレガッタ大会に出場しており、府中湖と同じ四国内にある土佐町で大会の事前強化合宿が行えるメリットがある。

### 5-4 土佐町でのアンケート調査

アンケートは、女性グループ全員及び送迎を行った男性の計13人に対し行い郵送回答を得た。回答者数は9人、アンケート回収率は75%であった。アンケート結果は次のとおりである。

質問1 性別を教えてください。

男：1人

女：8人

質問2 年代を教えてください。

50代：4人

60代：4人

70代：1人

質問3 スポーツ合宿の受入支援をされたことはありますか。

ある：9人

ない：0人

質問 4 スポーツ合宿の受入支援をするきっかけを教えてください。

- ①行政からの依頼 : 9 人
- ②町内の団体からの依頼 : 0 人
- ③所属する地域コミュニティなどが行っていたから : 0 人
- ④自ら参加 : 0 人
- ⑤その他 : 0 人

質問 5 スポーツ合宿の受入支援について従事している内容を教えてください。

- ①食事の提供 : 8 人
- ②送迎 : 1 人
- ③製品の差入れ : 0 人
- ④歓迎会出席 : 0 人
- ⑤スポーツ指導 : 0 人
- ⑥その他 : 0 人

質問 6 受入支援を行うことによる気持ちの変化を教えてください。

- ①やりがいを感じる : 5 人
- ②楽しい : 4 人
- ③変化はない : 0 人

質問 7 受入支援後の気持ちの変化を教えてください。

- ①毎年来てほしいと思う : 3 人
- ②来るのが楽しみ : 5 人
- ③変化はない : 0 人
- ④その他 : 1 人 (ニーズが合えばきていただきたい。)

質問 8 受入支援を通じたスポーツ参加への意識の変化を教えてください。

- ①自らもスポーツをしたくなった : 2 人
- ②家族や友人知人にスポーツを勧めたくなった : 6 人
- ③変化はない : 0 人
- ④その他 : 1 人

質問 9 質問 8 で「①または②と回答」した方にお聞きします。

- 現在、ご自身が何かのスポーツを行っていますか。(ウォーキングや体操も含む)
- ①受入支援を行うようになってからスポーツを始めた又は再開した : 0 人
  - ②受入支援を行うようになってからスポーツをする回数が増えた : 0 人
  - ③受入支援を行う前からスポーツを行っており受入支援による変化はない : 3 人
  - ④行っていない : 5 人
  - 回答なし : 1 人

質問 10 移住政策との比較についてお聞きします。

- ①移住政策よりもスポーツツーリストの受け入れの方が取り組みやすい : 3 人
- ②スポーツツーリストの受入よりも移住政策の方が取り組みやすい : 1 人
- ③どちらとも言えない : 5 人

質問 11 スポーツ合宿に来ている選手やコーチなどの方と直接、話をする機会について教えてください（コロナ以前とコロナ禍で異なる場合は、コロナ以前の状況で回答してください。）。

- ①チームによっては話をする機会がある : 6 人
- ②全てのチームと話をする機会がある : 3 人
- ③どのチームとも話をする機会はない : 0 人

質問 12 質問 11 で①又は②と回答した方にお聞きします。チームと話をする頻度を教えてください。

- ①よく話をする機会がある : 3 人  
(夕食前の配膳など手伝いに来てくれて色々話した。)
- ②時々話をする : 3 人
- ③合宿期間中に 1 回程度話をする : 3 人
- ④歓迎会の時に話をするがその他では話をしない : 0 人
- ⑤話をする機会はない : 0 人

質問 13 選手やコーチと話をすることによる変化を教えてください。

- ①応援する意欲が高まる : 8 人
- ②変化はない : 1 人
- ③応援する意欲が下がる : 0 人

質問 14 話をする機会があるチームとそうでないチームとの間に気持ちの差はありますか。

- ①話をするチームの方が応援する意欲が高まる : 7 人
- ②どちらも応援する気持ちに差は生じない : 1 人
- ③話をしないチームの方が応援する意欲が高まる : 1 人

質問 15 受入をするチームの属性について要望はありますか。

- ①プロチームやトップチームなど有名なチームに来てほしい : 1 人
- ②社会人チームに来てほしい : 0 人
- ③大学生チームに来てほしい : 3 人
- ④高校生以下のチームに来てほしい : 0 人
- ⑤チームの属性に要望はない : 4 人
- ⑥同じチームに来てほしい : 0 人
- ⑦その他（地域に合って、行政側が受入れたいチームならOK） : 1 人

質問 16 スポーツ合宿受入支援により,期待する効果について順位を付けてください.

期待する効果	優先順位
地域の人々のやりがい・楽しみの増加	1位
合宿者による地域情報(魅力・感謝など)の発信	2位
地域コミュニティ(結びつき)の形成	3位
地域の人々のスポーツへの関心度の増加	4位
経済的な効果	5位
地域アイデンティティ(特性・らしさ)の醸成	6位
受入チーム(選手やコーチなど)との交流促進	7位

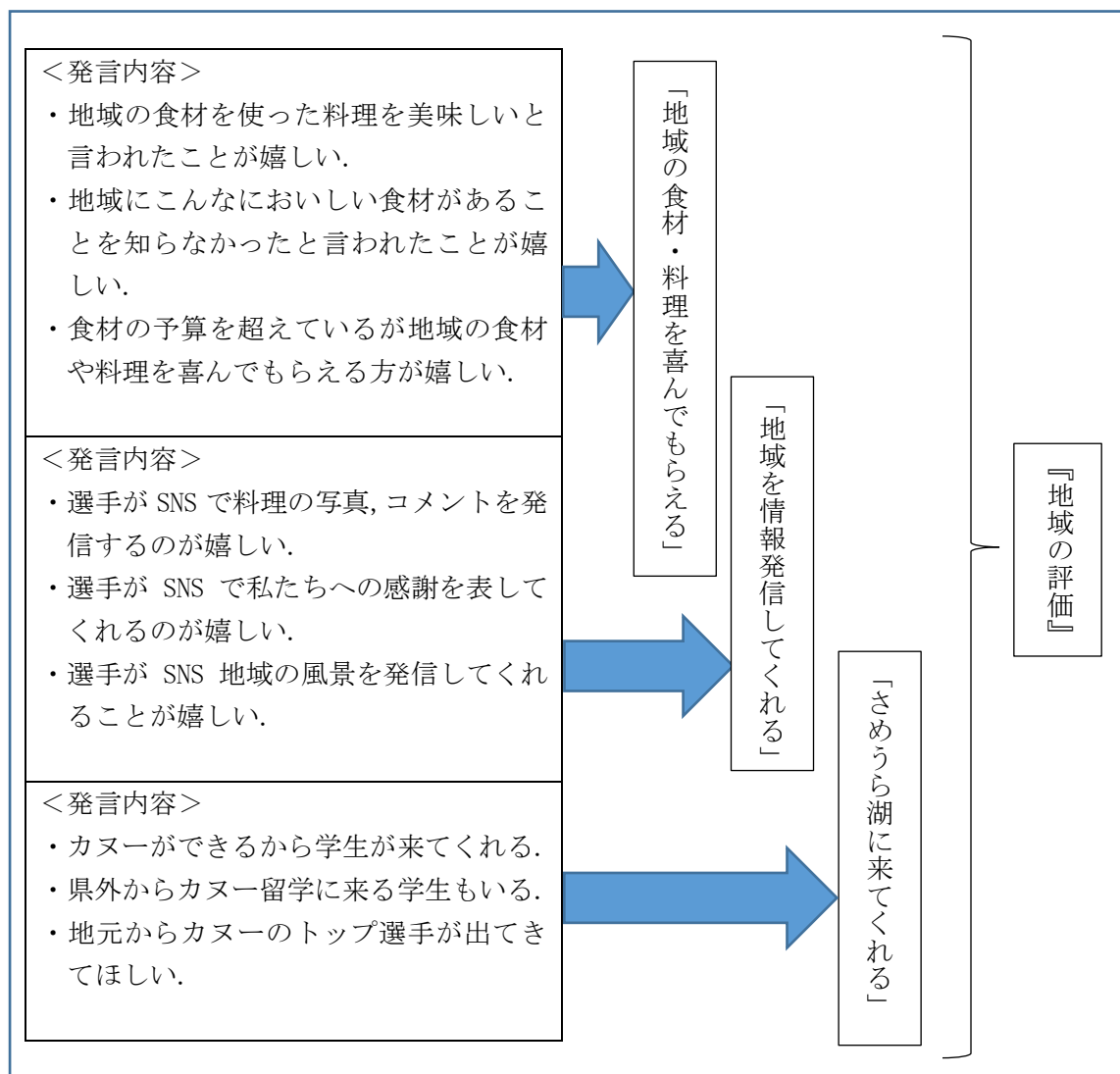
質問 17 最後に,四国遍路「接待文化」について教えてください.

①接待を行ったことがある:1人

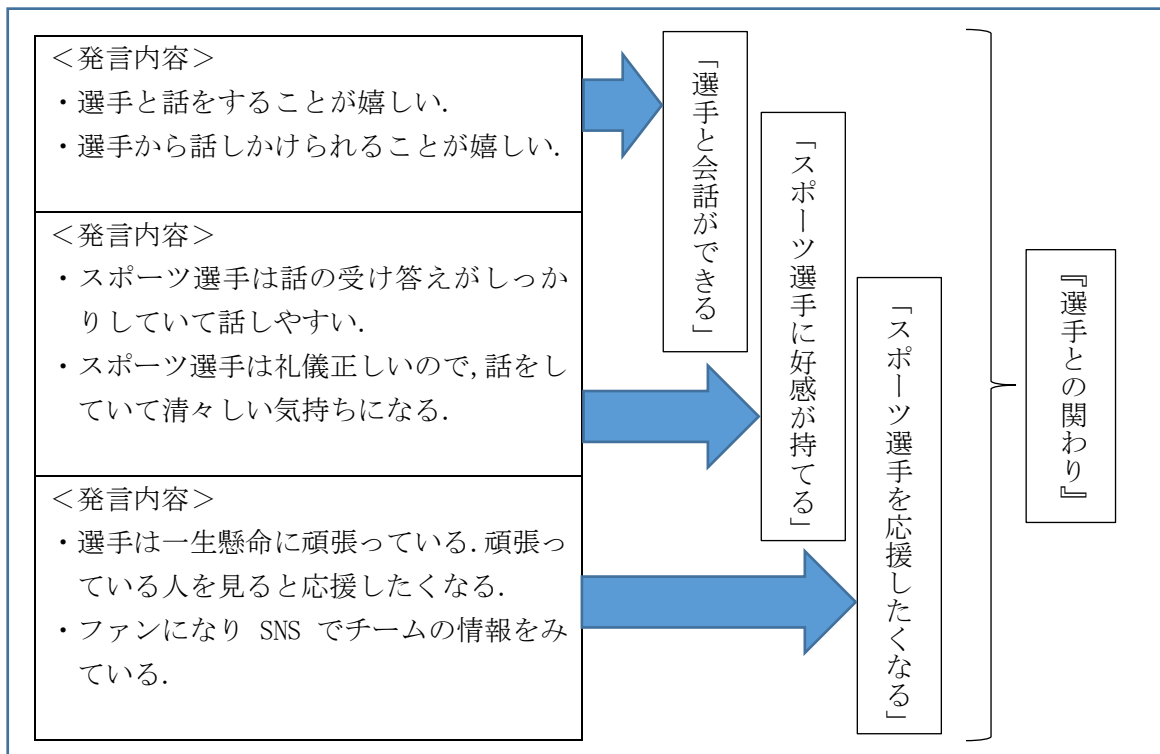
②ない:8人

### 5-5 土佐町でのデプスインタビュー

次にアンケート調査を補完するため、女性グループの代表者及び送迎を行った男性に対し、それぞれ 1 時間程度のデプスインタビューを行い、受入を行った際の心理的側面を深堀した。インタビュー調査の結果を以下のようにまとめる。インタビューの発言内容から、抽象概念を『』で、またこれらを構成する概念定義を「」表す。(図表 1, 2)



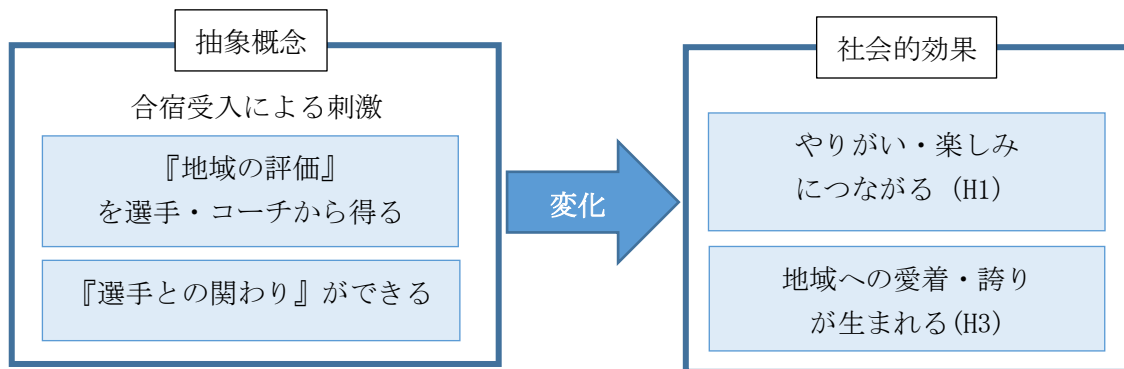
(図表 1)



(図表 2)

第一の抽象概念は、『地域の評価』である。『地域の評価』は、アンケート結果の質問 6「受入支援を行うことによる気持ちの変化」に対する回答「やりがいを感じる：5人、楽しい：4人」、質問 16「スポーツ合宿受入支援により、期待する効果の順位」に対する回答「1位：地域の人々のやりがいや楽しみの増加、2位：合宿者による地域情報（魅力・感謝など）の発信」の心理的側面が明らかになった。

「選手との関わり」では、質問 16「スポーツ合宿受入支援により、期待する効果の順位」に対する回答「受入チーム（選手やコーチなど）との交流促進：7位」と低いのが、受け入れる側は選手とコミュニケーションが図れることを期待していることが明らかになった。さらに、質問 13「選手やコーチと合宿と話をすることによる変化」に対する回答「応援する意欲が高まる：8人」、質問 14「話をする機会があるチームとそうでないチームとの間の気持ちの差」に対する回答「話をするチームの方が応援する意欲が高まる：7人」の心理的側面が明らかになった。これら 2つの抽象概念と社会的効果の関係を図表 3 に表す。

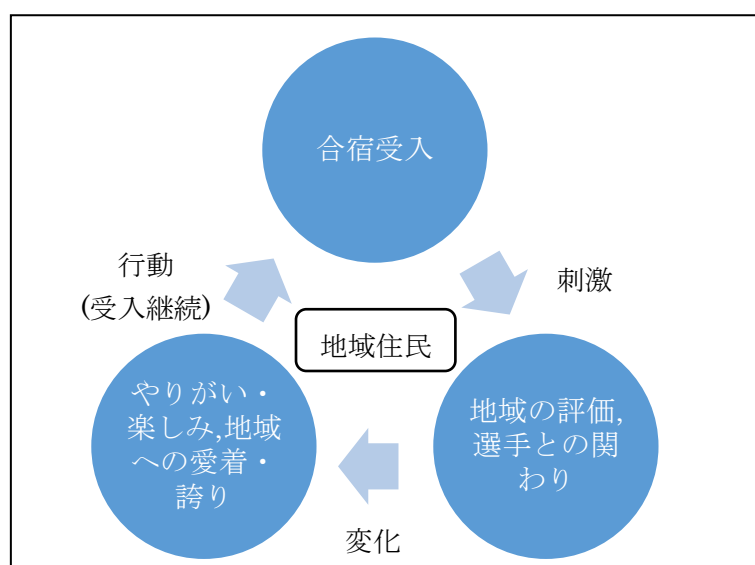


(図表 3)

これら、スポーツツーリストの受け入れに関わる地域住民は、関わることにやりがいを感じており、そして選手に地域（食材、料理、自然）を評価されること、選手が地域の情報を発信すること、選手とコミュニケーションをとることで、そのやりがいが増すと同時に地域への愛着・誇りが強くなると思われる。

また、スポーツ選手と関わることで、スポーツ選手の良さを認識し、再び訪れてほしい気持ちが生じる。さらに、スポーツへの関心が高まり、自身のスポーツの実施意欲の醸成、家族友人への運動・スポーツ参加の促進意欲が生じる。

さらに、こうした社会的効果が、質問 7「受入支援後の気持ちの変化」に対する回答「毎年来てほしいと思う：3人「来るのが楽しみ：5人」の心理的側面にあると考えられ、地域で合宿受入を継続していくために必要な体制の維持につながる好循環をもたらしている（図表 4）。



(図表 4)



## 5-6 土佐町でのグループインタビュー

グループインタビューでは、アンケート結果の質問 10「移住政策との比較」に対する回答「移住政策よりもスポーツ合宿の受け入れの方が取り組みやすい：3 人、スポーツツーリストの受入よりも移住政策の方が取り組みやすい：1 人、どちらも言えない：5 人」、質問 16「スポーツ合宿に期待する効果の順位付け」に対する回答「経済的な効果：5 位」に至った経緯を掘り下げた。インタビュー調査の結果を以下のようにまとめる。

### <発言内容>

- ・移住者はどのような人が来るのか分からない。
- ・移住者の方はたくさんいるが、いつの間にかいなくなっている人もいる。
- ・実際のところ移住者と関わることは少ない。
- ・スポーツ合宿は、どのような人が来るのか分かっている。
- ・スポーツ合宿は、役場から支援を依頼されている。

### <発言内容>

- ・スポーツ合宿の受入れで、個人的な利益を求めようとは思っていない。
- ・地域に一定の経済的効果をもたらすと思うが、合宿といっても始まったばかりで、件数も少ないので経済的効果は実感していない。
- ・合宿の受入は、私達が集まる機会を作り出しており、そういった効果が大きい。

移住政策とスポーツツーリストの受入れの比較に関する質問回答の心理的側面として、属性の有無が作用していることが見受けられた。スポーツツーリストは選手やコーチであり、その属性が明確である。さらに、合宿の受入を通じてスポーツツーリストの良さ（礼儀正しい、話しやすい、好感が持てる）を認識している。一方で、移住者の素性、社会的なつながり、その地域に移住した目的は人それぞれであり、移住者を一つの属性を括ることは困難である。つまり、スポーツツーリストという属性は分かりやすく好印象的であり、属性を持たない移住者は相手がどういった者か一見わからない警戒心のようなものがある。こういった側面から、「移住政策よりもスポーツ合宿の受け入れの方が取り組みやすい」と回答した方が多かった要因と推測される。なお、回答は「どちらも言えない：5 人」が最も多い。

また、経済的効果については、スポーツ合宿の受入が 2022 年 3 月（8 日間）、2023 年 3 月（13 日間）の 2 回であったことや、合宿期間が 10 日前後と短期間であったことから地域への経済的効果を実感するまでには至らず、個人的な経済的効果への期待も弱いものと推測される。

以上の結果から、「町の政策として移住促進よりスポーツ・ツーリズムの方が取り組みやすい（H4）」、「経済的効果より社会文化的効果を期待している（H5）」を十分に支持する結果とはなっていない。

## 5-7 黒潮町の概要

次に黒潮町の研究結果を述べる。黒潮町は四国の南西部の幡多郡に位置し、人口は10,404人(2023年)、2006年に大方町と佐賀町が合併した町である。大方地区は、南国特有の温暖で雨が多い気候を活かし、早くから施設園芸や花卉、水稻栽培が行われており農業が盛んである。佐賀地区は、カツオの一本釣り知られており漁業が盛んである。大方地区にある延長4kmの入野浜は、土佐湾沿岸でも代表的な砂浜海岸であり、名勝“入野松原”を中心に雄大な白浜が広がる。こうした豊かな自然環境の中に、体育館・サッカー場・パークゴルフ場などのスポーツ施設が整備された「スポーツゾーン」、キャンプ場・サイクリングロードが整備された「海浜文化ゾーン」を有する県立土佐西南大規模公園がある。また、入野浜には、美しい砂浜を美術館に見立てた砂浜美術館がある。ここでは、「私たちの町には美術館はありません。美しい砂浜が美術館です」をコンセプトに「美しい松原」や沖に見える「くじら」、流れ着く「漂流物」など全てを作品としている。毎年GW期間中には、浜辺でTシャツアート展が開催され、日本全国から公募した写真、イラストを白いTシャツ約1,000枚にプリントし、浜辺に杭を打ち、洗濯物を干すように並べて展示している。



(黒潮町の位置図)

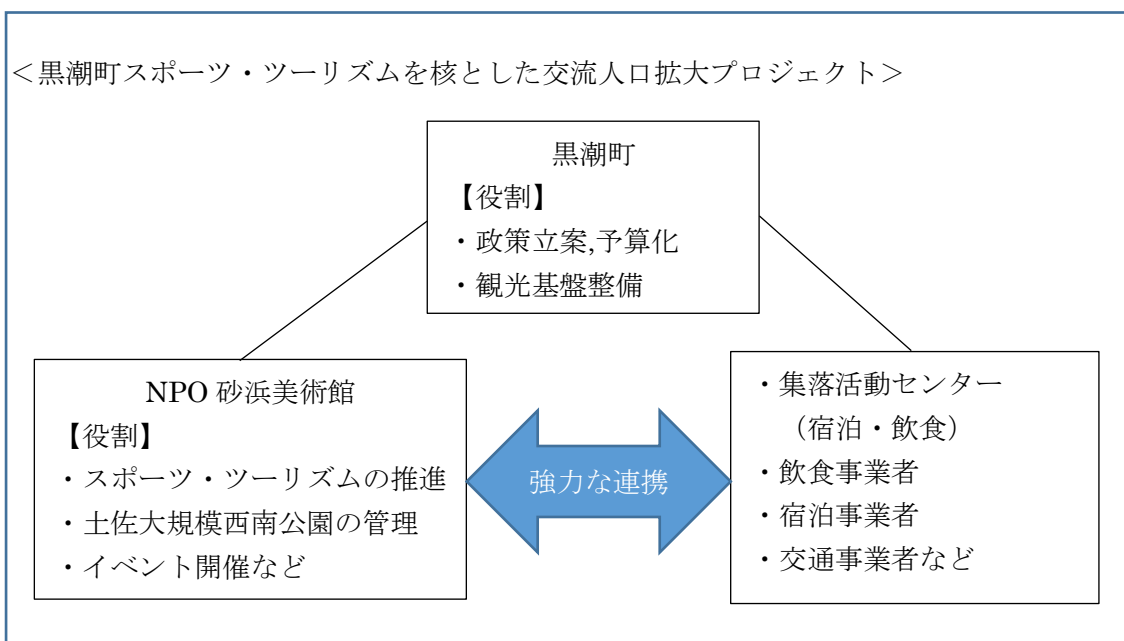


(土佐西南大規模公園)

## 5-8 黒潮町とスポーツ・ツーリズムの関係

土佐西南大規模公園は、1972年に都市計画決定され、1983年にサイクリングロードが部分開園、1988年にサッカー場完成、その後、体育館、多目的運動広場、スケートパークなどが整備され、2017年には人口芝の球技場2面がオープンした。これにより、天然芝の球技場2面、人工芝球技場2面の計4面を持つ県内屈指の球技場となった。この土佐西南大規模公園(大方地区・佐賀地区)の指定管理(R2.4.1~R7.3.31)の受託者は特定非営利活動法人NPO砂浜美術館(1989年設立)が行っている。NPO砂浜美術館は、公園の指定管理の他にTシャツアート展などの各種イベント開催、ホエールウォッチング、防災学習プログラム、スポーツ・ツーリズムを展開している。事業のなかで増加傾向にあるスポーツ・ツーリズムは、旅行代理店としてsunabi(すなび)スポーツを展開し、スポーツ施設や宿泊、弁当などの手配、合宿・大会の企画・運営、子供達を対象にした砂浜トレーニングのコーディネーションを行っている。黒潮町役場では、町内に宿泊するアマチュアスポーツ合宿に対して助成制度を設

け、官民が連携してスポーツ・ツーリズムを推進している。豊かな自然を体感できるスポーツを発信していくことで、町の持つ魅力を磨き上げ、スポーツ・ツーリズムを核とした交流人口の拡大を推進(スポーツ・ツーリズムを核とした交流人口拡大プロジェクト図表5)している。また、黒潮町には宿泊施設が少ないことから、集落活動センターで合宿者が宿泊できるように整備している。このように、宿泊、弁当手配を黒潮町内で完結させ、黒潮町に経済的効果が生まれるビジネスモデルを構築している。また、大規模なサッカー大会が開催される場合は、近隣の市町村とも連携し、土佐西南大規模公園の球技場に加えて、四万十市や宿毛市の球技場の活用、また、同市の宿泊施設の紹介を行っている。



(図表 5)

### 5-9 集落活動センター

アンケートは、西南大規模公園を活用したスポーツ合宿や大会に参加するために全国から集まってきた学生のチームの宿泊受入を行っている、集落活動センター「であいの里蜷川」、「かきせ」で活動中の地域住民を対象に行った。集落活動センターは、地域住民が運営主体となり、地域おこし協力隊など地域外からの人材も受け入れながら、旧小学校や集会所などを拠点に、それぞれの地域の課題やニーズに応じて、生活、福祉、産業、防災などの様々な活動に総合的に取り組む仕組みである。2012年に高知県が、中山間地域(山間地、その周辺の地域、そのほか地理的条件が悪く、農業をするのに不利な地域)の集落維持の仕組みづくりとして開始し、10市17町5村、65カ所の集落活動センターが開所(2022年5月時点)。中山間地域では、高齢化の進行や人口の減少に伴う地域活動の担い手不足、買い物や移動手段といった生活面での不安、農林水産業を担う人材の不足など、さまざまな課題に直面している。その一方で、集落への愛着や誇りを感じながら、今後もここに住み続けたいという思いを持つ地域住民がいる。

集落活動であいの里センター蜷川は、廃校になった蜷川小学校を利用し、2002年に開催さ

れた高知国体で、地区の女性が国体選手の食事などのサポートを担ったことがきっかけに活動が開始した。そこでの交流を通じて、地区や自分自身が元気になると実感し、同年 11 月に女性 8 名が 2 万円ずつ出資し「であいの里」を結成した。結成後は地区の生産物を使用した加工事業、田舎暮らし体験、自然体験の受け入れなどを行い、2007 年に本格的に地区の組織として、校舎を活用した宿泊事業などを行っている。2022 年には、一般社団法人であいの里蜷川を設立し法人化している。蜷川地区の人口は 247 人、123 世帯（2021 年 6 月）。集落活動センターかきせは、かきせ川地域づくり協議会が 2003 年から進めてきた地域づくりの計画を基に、2017 年に集落活動センターかきせを開所し、スポーツ合宿の受入れ、合宿チームへの弁当づくりなどを行っている。かきせ地区の人口は 320 人、156 世帯（2021 年 6 月）。

#### 5-10 黒潮町でのアンケート調査

アンケートは、それぞれのグループの代表者を通じて依頼し、郵送回答を得た。回答者数は蜷川 7 人、かきせ 6 人であった。アンケート結果は次のとおりである。

##### 質問 1 性別を教えてください。

男：1 人

女：12 人

##### 質問 2 年代を教えてください。

40 代：1 人

50 代：3 人

60 代：5 人

70 代：6 人

##### 質問 3 スポーツ合宿の受入支援をされたことはありますか。

ある：14 人

ない：0 人

##### 質問 4 スポーツ合宿の受入支援をするきっかけを教えてください。

①行政からの依頼 : 0 人

②町内の団体からの依頼 : 2 人

③所属する地域コミュニティなどが行っていたから : 7 人

④自ら参加 : 4 人

⑤その他 : 0 人

質問 5 スポーツ合宿の受入支援について従事している内容を教えてください。

- ①食事の提供 : 12 人
- ②送迎 : 0 人
- ③製品の差入れ : 1 人
- ④歓迎会出席 : 0 人
- ⑤スポーツ指導 : 0 人
- ⑥その他 : 0 人

※複数回答可

質問 6 受入支援を行うことによる気持ちの変化を教えてください。

- ①やりがいを感じる : 5 人
- ②楽しい : 8 人
- ③変化はない : 2 人

※複数回答可

質問 7 受入支援後の気持ちの変化を教えてください。

- ①毎年来てほしいと思う : 8 人
- ②来るのが楽しみ : 4 人
- ③変化はない : 2 人
- ④その他 : 0 人

※複数回答可

質問 8 受入支援を通じたスポーツへ参加への意識の変化を教えてください。

- ①自らもスポーツをしたくなった : 2 人
- ②家族や友人知人にスポーツを勧めたくなった : 2 人
- ③変化はない : 8 人
- ④その他 : 0 人

※複数回答可

質問 9 質問 8 で「①または②と回答」した方にお聞きします。

現在、ご自身が何かのスポーツを行っていますか。(ウォーキングや体操も含む)

- ①受入支援を行うようになってからスポーツを始めた又は再開した : 0 人
- ②受入支援を行うようになってからスポーツをする回数が増えた : 0 人
- ③受入支援を行う前からスポーツを行っており受入支援による変化はない : 3 人
- ④行っていない : 2 人
- 回答なし : 1 人

質問 10 移住政策との比較についてお聞きします。

- ①移住政策よりもスポーツツーリストの受け入れの方が取り組みやすい : 5 人
- ②スポーツツーリストの受入よりも移住政策の方が取り組みやすい : 0 人
- ③どちらとも言えない : 8 人

質問 11 スポーツ合宿に来ている選手やコーチなどの方と直接, 話をする機会について教えてください (コロナ以前とコロナ禍で異なる場合は, コロナ以前の状況で回答してください) .

①チームによっては話をする機会がある : 3 人

②全てのチームと話をする機会がある : 6 人

③どのチームとも話をする機会はない : 3 人

質問 12 質問 11 で①又は②と回答した方にお聞きします. チームと話をする頻度を教えてください.

①よく話をする機会がある : 5 人

②時々話をする : 5 人

③合宿期間中に 1 回程度話をする : 0 人

④歓迎会の時に話をするがその他では話をしない : 0 人

⑤話をする機会はない : 0 人

質問 13 選手やコーチと話をする事による変化を教えてください.

①応援する意欲が高まる : 9 人

②変化はない : 2 人

③応援する意欲が下がる : 0 人

質問 14 話をする機会があるチームとそうでないチームとの間に気持ちの差はありますか.

①話をするチームの方が応援する意欲が高まる : 7 人

②どちらも応援するする気持ちに差は生じない : 5 人

③話をしないチームの方が応援する意欲が高まる : 0 人

質問 15 受け入をするチームの属性について要望はありますか.

①プロチームやトップチームなど有名なチームに来てほしい : 1 人

②社会人チームに来てほしい : 0 人

③大学生チームに来てほしい : 3 人

④高校生以下のチームに来てほしい : 1 人

⑤チームの属性に要望はない : 9 人

⑥同じチームに来てほしい : 0 人

⑦その他 : 0 人

質問 16 スポーツ合宿受入支援により,期待する効果について順位を付けてください.

期待する効果	優先順位
経済的な効果	1位
地域の人々のやりがいや楽しみの増加	2位
地域コミュニティ(結びつき)の形成	3位
地域アイデンティティ(特性・らしさ)の醸成	4位
合宿者による地域情報(魅力・感謝など)の発信	5位
受入チーム(選手やコーチなど)との交流促進	6位
地域の人々のスポーツへの関心度の増加	7位

質問 17 最後に,四国遍路「接待文化」について教えてください.

①接待を行ったことがある:8人

②ない :5人

#### 5-11 黒潮町でのデプスインタビュー

次にアンケート調査を補完するため,両方の集落活動センターの方に対し,それぞれ1時間程度のデプスインタビューを行い,受入を行った際の心理的側面を深堀した.インタビュー調査の結果を以下のようにまとめる.抽象概念を『』で,またこれらを構成する概念定義を「」,さらにインタビューの発言を<>で表す.

#### 『地域資源の活用』

「地域への思い」

<地域を元気にするために何かやらなければと思い,8人で活動を始めた>

<自分1人が楽しいというより,地域の皆が楽しくなることが楽しい>

<夏休みになる7月下旬から8月は予約でいっぱいになる>

<朝食が6時30分に必要な時は,準備のため3時30分から準備する場合もある>

<一方で地域コミュニティの仕事は忙しすぎてもよくない>

「地域内で経済が循環する」

<西南大規模公園に合宿にきても,地域の中に宿泊施設がなく地域にお金が落ちる仕組みがなかった>

<食材も地元産を使い地域で経済を回すことを考えている>

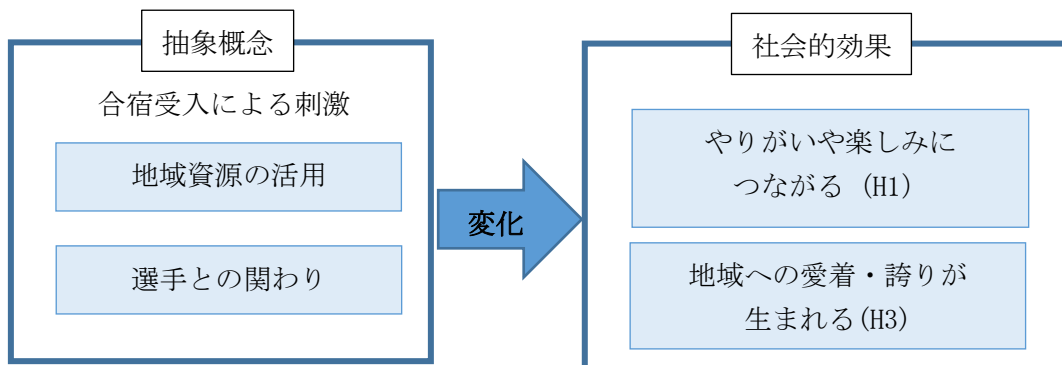
『選手との関わり』

「選手と親しむ」

- <若い人達が来て地域の皆で一緒に話をするのが楽しい>
- <宿泊したチーム写真を飾っている.次にまた来るのを楽しみにしている>
- <大変な時もあるが,やりがいもある>
- <自宅で採れた野菜を差入れしている>

第一の抽象概念は、『地域資源の活用』である。『地域資源の活用』は、アンケート結果の質問 16「スポーツ合宿受入支援により、期待する効果について順位」に対する回答「経済的な効果：1 位, 地域の人々のやりがいや楽しみの増加：2 位, 地域コミュニティ（結びつき）の形成：3 位」の心理的側面が明らかになった。

「選手との関わり」では、土佐町での調査と同じ結果と言える。質問 16「スポーツ合宿受入支援により、期待する効果の順位」に対する回答「受入チーム（選手やコーチなど）との交流促進：6 位」と低い、受け入れる側は選手とコミュニケーションが図れることを期待していることが明らかになった。さらに、質問 13「選手やコーチと合宿と話をすることによる変化」に対する回答「応援する意欲が高まる：9 人」、質問 14「話をする機会があるチームとそうでないチームとの間の気持ちの差」に対する回答「話をするチームの方が応援する意欲が高まる：7 人」の心理的側面が明らかになった。これら 2 つの抽象概念と社会的効果を図表 6 に表す。



(図表 6)





(集落活動センター蜷川)



(チームの写真)



(メンバー達)



(集落活動センターかきせ)



### 5-12 土佐町と黒潮町との調査結果の比較

土佐町, 黒潮町での質問に対する回答結果のうち, 最も回答が多かった答えを比較結果として図表 7 に表す.

質問 番号	質問項目	回答内容（最も回答が多かった答えを1つ記載）	
		土佐町	黒潮町
4	受入支援をするきっかけ	行政からの依頼	所属する地域コミュニティなどが行っていたから
6	受入を行うことの気持ちの変化	やりがいを感じる	やりがいを感じる
7	受入後の気持ちの変化	来るのが楽しみ	毎年来てほしいと思う
8	スポーツ参加への意識の変化	人に勧めたくなった	変化はない
9	質問8で①②と回答した方に質問. 現在スポーツをしているか	行っていない	前からスポーツを行っており受入支援による変化はない
10	移住政策の比較	どちらとも言えない	どちらとも言えない
11	選手と話す機会	チームによっては話す	全てのチームと話す
12	質問11で話す機会があると答えた人に質問. チームと話すインド	よく話をする/時々話をする/期間中1回程度 (3回答が同回答数)	よく話をする/時々話をする (2回答が同回答数)
13	話をすることによる変化	応援意欲が高まる	応援意欲が高まる
14	話するチームとしないチームとの気持ちの差	話をする方が応援する意欲が高まる	話をする方が応援する意欲が高まる
15	受入チームの属性の要望	チームの属性に要望はない	チームの属性に要望はない
16	スポーツ合宿受入による期待する効果	地域の人々のやりがいや楽しみ	経済的効果
17	四国遍路で接待を行ったことがあるか	ない	ある

(図表7)

## 第6章 まとめ

本調査は、スポーツツーリストを受け入れる地域において、受入に関わる地域住民にもたらす社会的効果を明らかにすることである。具体的には、受入を通じて、やりがい、スポーツ参加の動機付け、地域への愛着・誇り、コミュニケーションの形成過程を明らかにするとともに、スポーツ・ツーリズムの施策と移住政策との比較を行うものである。調査の結果、移住政策とスポーツ・ツーリズム政策に対する差は一定あるものの十分に支持されるものとは言えない結果となった。

一方、社会的効果については、以下に示す通り合宿受入による地域の評価、地域資源の活用、及び選手との関わりが重要な要素であることが明らかになった。

土佐町は、さめうら湖を地域活性化の拠点として、その活動を担う土佐町スポーツコミッションを設立し、学生のスポーツ合宿誘致を行うとともに、その支援を地域住民に依頼したことで、地域住民に社会的効果が生じた可能性があることが示された。地域住民は、受入を通じて地域コミュニティの形成をより強固なものにするとともに、学生たちに食や文化など地域が評価されることや、学生達との会話など学生との関わりを持つことで、やりがいや楽しさ、地域のアイデンティティの醸成がなされた。

一方、黒潮町では、土佐西南大規模公園を核としたスポーツを通じた街づくりなどを進めてきた結果、地域住民が廃校跡地の集落活動センターを宿泊施設として運用し始め、地域で経済が循環する仕組みが生まれた。

こうした地域資源を生かした地域ならではのスポーツ・ツーリズムの取組は、受入に関わる地域住民に社会的効果を生み、そして地域に経済的効果をもたらす可能性があることを明らかにした。

つまり、地域の活性化には、地域資源を効果的に活用することで、そこに暮らす人々が何かの役割を得て、それを果たす過程において、やりがいや楽しみ、地域アイデンティティの醸成などの社会的効果に繋がる仕組づくりを構築することが重要である。そして、その仕組から経済的効果が生まれることで、持続可能な地域の活性化といった好循環をもたらすと思われる。そういった意味で、今後スポーツ・ツーリズムがもたらす新たな地域活性化の形としては、社会的効果と経済的効果が、相互作用をする補完関係をもたらすような制度設計が必要ではないだろうか。

一方、本調査には以下のような限界がある。

- ・アンケート調査では、サンプル数を増やすとともに、本県以外で同調査を行い調査結果が本県の特異的なものか、全国的なものかなどに関する検証が必要である。
- ・社会的効果の検証では、自治体においてスポーツ・ツーリズムによる社会的効果をどのように捉えているのか検証が必要である。併せて、スポーツ・ツーリズムによる文化的な効果の検証も必要である。
- ・移住政策との比較では、地域で移住政策を推進する方を対象とした同調査を実施し効果測定を行う必要である。

これらは、将来の研究課題となりうる重要な論点である。

## 第7章 参考文献・資料

### <先行研究・文献>

- 原田宗彦(2020)スポーツ地域マネジメント
- 木田悟 (2013)スポーツで地域を拓く
- 木田悟, 堀繁, 薄井充裕 (2014)スポーツで地域をつくる
- 秋吉遼子(2014)沖縄県の住民とプロ野球キャンプ観戦者からみたスポーツツーリズムの推進に関する研究
- 秋吉遼子(2014)地域住民におけるスポーツツーリズムの効果の認知に関する研究
- 秋吉遼子(2012) スポーツツーリズムを通じたまちづくりに関する研究
- 原田理人 (2017) スポーツをテーマとした地域振興の方向性
- 山口志郎(2016)日本におけるスポーツボランティアの概念化
- 山口志郎(2018)スポーツイベントが開催地域にもたらす効果
- 和田崇(2021)スポーツまちづくりがもたらす社会経済効果
- 和田崇(2020)地域活性化手段としてのスポーツ
- 中澤純治(2018)スポーツツーリズムによる 地域経済振興の経済分析
- 渡辺律子 (2013)地域資源を生かしたスポーツツーリズムの在り方について
- 中野文彦 (2012)スポーツを通じた地域の活性化 スポーツ・ツーリズムを考える
- 杉谷正次(2012)沖縄観光におけるスポーツ・ツーリズムの現状と課題
- 内田和寿(2015)スポーツツーリズムによる国際交流
- 渡邊公章(2018)スポーツ合宿誘致による地域活性化の可能性
- 辻本千春(2012)スポーツ観光による地域活性化に関する一考察・新潟県十日町市
- 上村良一(2014)持てる力をいかに活かすか 十日町市の試み
- 弓田恵理香(2021)地域スポーツコミッションの役割
- 伊藤央二 (2021)スポーツツーリズムの発展
- 渡辺均(2014)経済波及効果の可能性と限界
- 関朋昭(2016)スポーツ合宿の経済波及効果に関する研究
- 押見大地(2012)スポーツチームの合宿地選考における意思決定プロセスの検討
- 渡邊 貴大(2019)定住人口と交流人口の両輪を生かした地域活性化の可能性
- 仲澤真他(2017)よくわかるスポーツマーケティング
- 日本政策投資銀行 (2015)スポーツツーリズムの展開
- 日本スポーツツーリズム推進機構(2015)スポーツツーリズムハンドブック
- 日本スポーツツーリズム推進機構(2022)実践スポーツツーリズム

<ホームページ>

- 高知県 (2023) ホームページ (2023. 3. 29 閲覧)  
<https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/141801/>
- 高知県 (2023) ホームページ (2023. 4. 2 閲覧)  
<https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/060101/2013021617seminar2.html>
- 土佐町(2023)ホームページ (2023. 4. 2 閲覧)  
<http://www.town.tosa.kochi.jp/>
- 十日町市(2023)ホームページ(2023. 3. 20 閲覧)  
[https://www.city.tokamachi.lg.jp/soshiki/kyoikuiinkai\\_bunkasportsbu/sportsshinkoka/1/gyomu/hosttown/7651.html](https://www.city.tokamachi.lg.jp/soshiki/kyoikuiinkai_bunkasportsbu/sportsshinkoka/1/gyomu/hosttown/7651.html)
- 土佐町スポーツコミッションホームページ (2023. 4. 2 閲覧)  
<https://tosacho-sc.jp/news>
- 水資源機構(2023)ホームページ (2023. 4. 2 閲覧)  
[https://www.water.go.jp/yoshino/ikeda/sameura/komen\\_riyou2.html](https://www.water.go.jp/yoshino/ikeda/sameura/komen_riyou2.html)
- 朝日新聞デジタル(2023. 3. 16 閲覧)  
<https://www.asahi.com/articles/ASR3H7K5PR39PTLC00Q.html>
- 国土交通省(2023. 4. 3 閲覧)  
<https://nlftp.mlit.go.jp/kokjo/tochimizu/F3/data/pdf/3907t.pdf>
- 農林水産省 (2023. 4. 16 閲覧)  
[https://www.maff.go.jp/j/hey/kodomo\\_sodan/0502/02.html](https://www.maff.go.jp/j/hey/kodomo_sodan/0502/02.html)
- 黒潮町(2023)ホームページ(2023. 4. 3 閲覧)  
<https://www.town.kuroshio.lg.jp/>
- 一般社団法人高知県 UI ターンサポートセンター(2023. 4. 3 閲覧)  
<https://kochi-iju.jp/service/cyusankan.html>
- 月間事業構想 (2018 年 4 月号) (2023. 5. 7 閲覧)  
<https://www.projectdesign.jp/201804/2dmo/004777.ph>